



戦前百四十年祭

御恩報じの積み重ねを



徒歩団参に参加した若者たち。おぢばのしだれ桜の前で記念撮影（3月27日）

真 朋

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

日々という常という、日々常に誠一つとい
う。誠の心と言え、一寸には弱いように
皆思ふなれど、誠より堅き長きものは無い。
誠一つが天の理。
おかきさげ

私たちは、親神様から一瞬の絶え間もなく御守護を頂
戴して生きています。その御守護に対して、一瞬の絶え
間もなく御恩報じをすることは、私たちにはできません。
だからこそ、せめて毎日少しずつでも御恩報じをさせて
いただきたい。出直して身体をお返しするその日まで、
親神様の大きな御守護を身を感じ、感謝の心をしっかりと
と形に表すことを、日々常々積み重ねていくことが大切
です。

親神様への感謝の心で行うことは、すべてひのきしん
と仰せくだいます。身近な方に明るく声をかける。道
に落ちているごみを拾う。靴をきれいに並べる。形はど
うあれ、親神様の御守護を実感し、喜びいっぱい感謝の
心で実行する。たとえ小さなことでも、毎日積み重ねれ
ば堅き長きものとなり、親神様はその誠の心を大きくお
受け取りくださいます。

こうした積み重ねは「理づくり」となり、きっと将来
のおたすけや丹精に生きてくることでしょう。

教祖年祭の三年千日は私たちにとって大きな成人の旬。
教祖の笑顔の思い浮かべながら、毎日の小さな御恩報じ
を積み重ねましょう。

正面方加

「陽気ぐらしのキ
ーワード 感謝・
慎み・たすけあい」
の看板や横断幕は、
ブラジルの教会で
もポルトガル語で
掲げられている。

実は、ポルトガル語に「慎み」
という言葉がないので、どう
いう言葉で書かれているかを
調べてみると「Satisfacao」
（サティスファソン）と書か
れていた。辞書を引くと「十
分・満足な・満たされた・満
腹」とある。もちろん天理教
海外部翻訳課の方が当たった言
葉だと思うが、素晴らしい意
訳だと思う。

慎みとは、今与えられてい
る状況に満足し、それ以上求
めることなく、「結構だな、あ
りがたいな」と喜ぶたんのう
の心こそが慎みである。

常に明るく前向きな教えを、
教祖のひながたを辿る上での
心得としたい。

《3月月次祭 挨拶》

心の成人を促し

おさづけを取り次ぐ三年千日

大教会長 井筒梅夫

皆様方には時旬の御用の上にお励みくださいます、誠に苦勞様でございます。共々に3月の月次祭を勇んで勤めさせていただきますましたことは、誠にありがたい次第でございます。

この道は、つとめとさづけによって陽氣ぐらしへの御守護を頂く道であるとも言ってもよいと思います。殊におさづけのお取り次ぎは、欠かすことのできない信仰実践です。

教祖からお教えいただいたかぐらづとめは、よろづたすけの御守護を下します。よろづたすけですから、あらゆるものに御守護くださるのであり、このよろづたすけのつとめの理を取り次ぐのが、おさづけの理です。

人は病氣になれば病院にかかり、薬を処方され、治療をします。教祖は医者、薬は修理肥として位置付けられておられるのです。医療は目に見える部位や臓器に対処するものです。傷があれば消毒し、熱があれば下げ、傷んだ臓器は修復を試み、治療する。これが修理肥としての医療の役割です。

一方でこの道の信仰は、目に見えない部分、心やいんねんに働きかけるのです。おたすけにかかる際には、この部分は決し

て見落としてはなりません。

みかぐらうたに、

十下 このたびあらはれた やまひのもとハこゝろから

(十下り目)

と教えていただきます。おふでさきにも、

これからハいかなむつかしやまいでも

心したいになをらんでなし

五号 13

と示されています。つまり心と身上は直接関わっており、おたすけ人は病の元は心にあることを相手に伝えて、ほこりを払い、胸の掃除を促します。そして、病んでいても人をたすける心を持てるよう、心を入れ替える努力を促して丹精していくのです。また、前生で積んだほこりの心は、現生では悪いんねんとして現れてきます。前生のことは誰も覚えていませんから、身に覚えのないことで悩み苦しむのは本当につらいことです。おたすけ人はまず、相手が前生のいんねんを自覚できるように、苦心をして導くことが肝心です。

そしてこの前生のいんねんをさんげするにはたんのうしかありません。

たんのうは前生のいんねんさんげ。

ならん中たんのうするは誠、誠は受け取る。 明治三十四年四月二十日

明治三十年十月八日

と教えられるように、たんのうの心を受け取っていただいて、大難を小難、無難に御守護いただくのです。目の前の世界はそ

の人の心通り、いんねん通りの世界ですから、成ってきた姿の中に親神様の思召と親心を悟って、「これがあるがたい」と、たんのうの心を治めてもらえるように丹精していくのです。そして、「人救けたら我が身救かる」という御守護を頂けるよう、共によりよくとして人だすけができるまでに導いていくことが、おたすけの目標とするところであります。

ほこりの心といんねんという、目に見えない部分が病の根です。この病の根を切っていたくのが、おさづけの理です。根には浅いものもあれば、深いものもあります。四方八方に強固に張られている根もあるわけです。一度のおさづけで、根の全てを切り取ることは難しいかもしれません。でも、取り次ぐたびに、少しずつでも病の根を切っていたいでいるのです。

よろづたすけのつとめの理を取り次ぐおさづけに、御守護のないことはないので。相手に心の入れ替えと心の成人を促しながら、おさづけを取り次いでいくことが、身上だすけだと思います。

さて、コロナ禍によって中断していましたが、祭典後のおさづけの取り次ぎを、4月の月次祭から再開することにいたしました。身体に不調を抱えていれば、申し出てください。周囲に身上の方がおられたら、その方をお連れして参拝してください。結構です。どうぞ遠慮なさらず、お取り次ぎを申し出てくださいと思います。

この三年千日、共に勇んでおたすけに励ませていただきましょう。今日の月次祭、大変ご苦勞様でした。

(要約)

立教百八十六年 三月 月次祭 祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には、月日にハセカイちう、ハミナわが子 たすけたいとの心ばかりで、との深い思召から、温かき親心を以て一れつをお育て下され、たすけ一条の道を付けて、陽気ぐらしへとお導き下さいます御慈愛の程は、誠に有難く勿体ない極みでございます。私共は、親神様の御心にお応えさせて頂きたいと思念じて、御教えの実践に努め、時句の御用に励ませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日は、おちばよりお許しを戴きました尊き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同、心を合わせて座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、三月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には今日を大切な一日と参集しました芦津に繋がる道の子達が、日頃賜る御恵みに御礼申し上げ、共に陽気ぐらしを祈念して勤める誠の心をお受け取り下さいまして、親神様にもお勇み下され、よろづたすけの御守護を賜りますよう御願ひ申し上げます。

私共をはじめ芦津に繋がる教会長、ようぼくは、論達に込められる親の思いを心に治めて、ひながたを抛り所に心の成人に努め、おたすけの心で時句の歩みを一手一つに勇んで進めさせて頂く所存でございます。

何卒時句の御用に励み伏せ込む一同の誠真実をお受け取り下さいまして、真心尽くすおたすけと丹精には自由自在の理にお導き下され、これの道が更に伸び広がつて、陽気ぐらしへの道の進展の御守護を賜りますよう、一同と共に慎んで御願ひ申し上げます。

《3月月次祭 神殿講話》

にをいがけ・おたすけに励んで
教祖にお喜びいただこう

役員 川畑澄博

皆様方には、教祖百四十年祭の三年千日の時句を勇んでお通りくださいまして、誠にありがとうございます。

私は会長職を後任に譲りましたが、10年前の現役会長の頃、年祭活動のときを思い返しますと、いよいよ年祭活動が始まり、三年千日を勇んで通ろうと心に決め、1年目の論達巡教を勤めた直後に、健康診断で引っ掛かり、精密検査で胆のうの異常が見つかりました。年祭活動中の節を家族でいろいろ思案する中で、種子島にある部内教会が前教会長出直し後、会長が不在で、教会の建物も台風被害で老朽化していましたので、「その教会をなんとか復興させていただこう」と心を定めました。

すると、再検査の結果で、悪いものではないと、小難を無難にしていただき、さらに年祭活動2年目には教会の復興の御守護を頂き、喜ばせていただきました。

ところが年祭活動3年目の春、体調が悪く、たまたま行った病院で、その日のうちに胃カメラを勧められ、胃がんが見つかりました。検査の結果に茫然（ぼうぜん）としましたが、そこで私は初めて心の底から病人だ人の気持ちを味わわせていただくことができました。

おふでさきに、
たんくとなに事にてもこのよふわ
神のからだやしやんしてみよ

三号 40・135
とありますように、純粹に神様にもたれる体験をさせていただいた

ように思います。

胃を全摘すると言われていたのですが、少し残していただけたと手術後に知り、自分の身をもって神様のお働きを深く感じました。

このかりものの身体がありがたさを改めて思い、日々の通り方や行いを改める節だったと思います。そして心の底から、ありがたさいっぱいの年祭を迎えることができました。

只今の時句の中で、身上や事情で悩み苦しんでいる方がおられましたら、教祖年祭の三年千日はたすけの句、たすかる句です。お互いにしっかりと、勤めさせていただきたいと思います。

教祖との出会い

3月は卒業シーズンで、新たな生活を初める方も多と思います。また新たな出会いの時期でもあります。人と人との出会いは、時には人生にとって大きな影響を与えてくれるものです。素晴らしい恩師や上司。また心から信頼できる

仲間のように、プラスになる方もいますが、良くないことを吹き込んだり、またきつく当たられたりして、心がいずんだりすることもあります。

しかし私たちは、自分の先祖や親々がたすけていただき、教祖に出会わせていただいた。そのおかげでこの教えを知り、御存命の教祖にお導きいただける。こんなありがたいことはないと思います。

私自身も妻と知り合い、この道にお引き寄せいただきました。そして御存命の教祖に出会わせていただき、今の私があると思います。現会長である息子が、地元の高校を卒業後、専修科に進学し、その後、おちばの会長宅で青年を勤めていたときのことです。御用で東筋を運転中、ある青年が目にも留まりました。彼は息子の地元の高校の友人で、修養科のハッピーを着ていたそうです。慌てて車を停め、友人に声を掛け、お互いびっくりしたそうです。

後日面会に行き、おちばや修養



科にいる経緯を聞くと、その友人は高校卒業後、関西へ就職したのですが、仕事関係のいろいろな事情から、一人途方にくれていたそうです。そんなとき、職場の近くで天理教の教会を見つけた。

彼はよくうちの教会に遊びに来て、みんなで食事をしたり、ひのきしんをしていました。それで、天理教の看板が目に残ったとき、息子のことを思い出し、「ここならたすけてくれるのではないか」と思って、その教会の門をくぐったそうです。そして、この会長さんに事情を説明し、そ

れならと修養科を勧められ、そのままおぢばに来て、不思議なことに息子と再会したのです。

高校のときに息子と出会って、教会に遊びに来ていたことで、彼の運命が変わったと思います。これは、教会に遊びに来て、教祖に出会わせていただいたおかげだと思います。

おぢばに帰り、をやの息をかけたいたくことは、信仰者にとって大切なことですが、教会はおぢばの出張り場所ですから、どんな理由でも教会に足を運ぶことは、今後の運命を変えるきっかけになるのだと思います。

その友人は、修養科中にようばくとなり、初めてのおさづけを息子に取り次いでくれました。もし彼が私の息子と友達でなかったら、この子の未来は全く変わっていたでしょう。

何がきっかけになるかは分かりません。ほんの少し差し伸べた手が人を救う、運命を変える大きな力になるのかもしれない。

ここにも教祖が

これは、ある教会長さんから聞いた話です。

その教会には孫がいて、その友達が遊びに来ました。教会を所狭しと走り回っていましたが、神殿の前で急に足を止め、教祖のお社を指さして「あそこにいる赤い服を着たおばあさんは誰？」と聞いてきたのです。その方はびっくりして、「ここにも教祖がおられる」と思ったそうです。

私も、教祖は御存命で、今なお世界たすけの先頭に立って働きくだされていると何度も聞き、頭では分かっています。でも、同じ状況ならおそらく「ここにも教祖が」と言って驚くことでしょう。それぞれの教会には教祖がおいでくださり、私たちを結構にお導きくださっています。この教えを知らない方を一人でも多くお連れして、御存命の教祖にお会いしてもらえよう、日々を勇んで通らせていただきたいと思います。

末代へと続く道に

さて、数年前から感染症が流行し、生活が一変して、いろいろな制限がなされ、当たり前と思っていたことができなくなりました。

その中で私たちようばくが一番心苦しく寂しかったのは、身の方に直接おさづけのお取り次ぎができなかったことだと思います。

昨年、私共の部内教会の会長さんが出直されました。この会長さんは、私が何も分からない中、会長に就任した当初からずっと側にいて、私を支えてくださいました。口数は少ない先生でしたが、いつも陰日向なく、コツコツと勤めてくれました。

そんな中、昨年5月の部内の月次祭の夜に、脳梗塞で倒れられました。コロナ禍ですので、面会もできない中でしたが、「会長本人がおさづけに来てほしいと言っています」と、奥さんから連絡が入りました。

面会制限がとても厳しい中です。

どうにかたすかってもらいたいと病院へ向かいましたが、もちろん本人に直接おさづけはできません。看護師さんをお願いして、玄関先に連れてきてもらい、ガラス越しで病院の外から一心にお願いをさせていただきました。直接おさづけのお取り次ぎができないことが、こんなに苦しいものだと思いませんでした。

私自身も、10年前にがんの身上を頂いたとき、たくさんの方から毎日おさづけを取り次いでいただき、「教祖ありがとうございます」と、安心させていただきました。

たんくよふぼくにてハこのよふをはしめたをやがみな人こむで

十五号 60

このよふをはしめたをやか入こめばどんな事をばするやしれんで

十五号 61

と教えていただいています。ですから、家族の方も本当は、毎日おさづけに通いたかったと思います。奥さんは毎日必死にお願いずっとめを勤め、一生懸命おつくしも運ん

でくださいました。しかし、親神様の思惑により、9月に身上をお返しになりました。

出直す前日の夜、現会長の夢に出てきたそうです。いつものように始良の教会でタバコを吸いながら、息子に向かってニコニコと話しかけてきたそうです。

どのよふなゆめをみるのも月日なりなにをゆうのもみな月日やで

十四号 1

現会長に、教会家族のことを頼むとお願いしたかったのではないのでしょうか。その会長さんは、始良の教会のため、道の御用のため、人様のためにとご尽力くださいました。本当に感謝しかありません。

しかし、この道は末代で、続いていかなければなりません。先祖代々受け継がれていた教会を継ぐよう、家族で談じ合い、今月26日に奥さんが、会長の理のお許しを戴く運びとなりました。奥さんも、先代から繋いできた信仰のバトンを途切れさせずに子供に渡せるよう、精いっぱいつとめると心定め

をしてくださいました。

おふでさき号外に、

にちく心つくしたものだねを神がたしかにうけとりているしんちつに神のうけとるものだねわいつになりてもくさるめわなしたんくこのものだねがはへたならこれまっだいのこふきなるそやとお教えくださっています。

また論達では「教祖お一人から始まったこの道を、先人はひなたを心の頼りとして懸命に通じ、私たちがとつないで下さった。その信仰を受け継ぎ、親から子、子から孫へと引き継いでいく一歩一歩の積み重ねが、末代へと続く道となるのである。」とお聞かせいただきます。

私どもも、このお道が、教会が末代まで変わらず続いていくよう、日々コツコツと歩みを進めていきたいと思っています。

積極的に動く一年に

感染症下で、直接会わなくてもお互いの顔を見て話ができたり、

会議ができるようになるなど、便利なことも増えてきました。

しかし、教祖は声掛けではなく、「にをいがけ」とお教えくださいました。電話では伝えられない、映像では表現できない「にをい」をかけるということです。その人の近くまで足を運び、おたすけをする。これに勝るものはないのだと思います。

大教会長様は、この年祭活動の1年目を、思っているだけ、考えているだけにとどまらず、しようと思うこと、心に決めたことを、「まず動く」とにかく動く」と、日々自ら積極的に動く一年にしたい、とお打ち出してくださいました。

この一年、精いっぱいにをいがけ・おたすけに励み、3年後の教祖百四十年祭には、今よりも一歩でも二歩でもお互いが成人させていただき、教祖にお喜びいただけるよう、日々通らせていただきます。しよう。

はじめに大教会長よりお話（9
（11頁に要旨掲載）があり、子弟
育成に対する思いを述べられた。
次に、奥田正儀部員による「育
成プロジェクト7年をふりかえつ



続いて、グループトークでは、スクリーンに映し出された設問に答えるというスタイルで臨み、教員生活や子弟育成に関する設問に3人1組に分かれて活発な意見交換を行った。従来のねりあい比べ、少人数でのトークにより、一人ひとりがより多く語る貴重な時間となった。

その後、梶川和人部員が、来年開催する「道の後継者の集いⅢ」の対象者名簿について説明を行い、最後に山田部長が閉講挨拶。「私たちの心一つ、勤め方一つ、理づくり一つで、どんな御守護も頂戴できると信じて、この年祭活動も勇んで通らせていただく」と話を締めくくった。

[illegible]

大教会春季霊祭執行

3月24日、大教会神殿、祖霊殿で春季霊祭が厳かに執行された。

午前10時より神殿の儀で十二下りのおつとめを勤めた後、祖霊殿の儀。大教会長が祭文を奏上し、祭員列拝の後、在籍者、教会長、各会の代表者と、新たに合祀を願ひ出た9柱の關係者が随時祖霊殿前に参進し、参拝した。

祭典終了後、大教会長が挨拶。「私たちは道を通るときに、『祖霊様が働いてくださっているに違いない』と感じる瞬間がある。祖霊様が積んでくださった徳と、真実を伏



せ込んだ理に導いていただいている。祖霊様方のお力添えを切に願ひながら、教祖百四十年祭に向けて時句の歩みを進んでいきたい」と話された。

春季霊祭合祀

3月24日、春季霊祭において新たに合祀されました。

岩切きよ之霊

大教会婦人

島原分教会七代会長夫人

島田幸子之霊

島浜分教会四代会長

島田善信之霊

島浜分教会五代会長

八木幹雄之霊

東大屋分教会三代会長

児玉實次郎之霊

大阪港分教会役員

児玉重信之霊

大阪港分教会二代会長

児玉フリの霊

大阪港分教会二代会長夫人

瀬戸山孝治之霊

照南分教会三代会長

木村チヨ子之霊

大教会准婦人

芦明徳分教会二代会長夫人

立教百八十六年 春季霊祭祭文

これの祖霊殿にお鎮まり下さいます、初代真柱中山眞之亮の霊様をはじめ、二代真柱中山正善の霊様、初代真柱夫人中山たまへの霊様、本席飯降伊藏の霊様、並びに芦津大教会初代会長井筒梅治郎の霊様をはじめ、歴代会長の霊様、眞明芦津の上に尽くし伏せ込まれました役員、教会長、ようばく、信者諸々の霊様、更にはこの度新たに霊代に書き記し合せて祀る大教会婦人・島原分教会七代会長夫人岩切きよ之の霊様、島原部属島浜分教会四代会長島田幸子の霊様、島原部属島浜分教会五代会長島田善信の霊様、島原部属東大屋分教会三代会長八木幹雄の霊様、大島部属大阪港分教会役員児玉實次郎の霊様、大島部属大阪港分教会二代会長児玉フリの霊様、始良部属照南分教会三代会長瀬戸山孝治の霊様、大教会准婦人・芦明徳分教会二代会長夫人木村チヨ子の霊様、併せて壱千五百七柱の霊様の前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

御本部四柱の霊様には、道の親として神一条に苦心を重ねてご丹精下さり、温かき親心を以て道の子を導きお育て下さいました。お蔭を以て世界たすけの道が拓けて、今日のたすけ一条の道がございます。又、初代梅治郎の霊様には奇しきお手引きによりこれの御教えにお引き寄せ頂かれ、爾来、御恩報じに真実を尽くし伏せ込まれ、その御高德は眞明芦津の礎となり、道は伸び広まって今日の結構な姿をお見せ頂いております。又、夫々の霊様には親神様のお手引きのまに／＼道の草分の頃から代々と、会長を芯にならん中をも一手一つにたすけ一条にご丹精下され、或は国々処々に在っては、艱難苦勞の道すがら心倒さず真心を尽くして、陽気ぐらしを目標にお勤め下さいました。眞明芦津の道が年限と共に有難き理をお見せ頂き、今日も変わらず御教え通りたすけ一条に通らせて頂けますのも、親神様、教祖の厚き御守護、深き親心の現われではございませんが、又一つには霊様方が永の年限、代を重ねて伏せ込まれた真実の賜と、朝夕御礼を申し上げて怠る時とございません。その中にも今日のこの日は今年の春の霊祭を執り行う定めの日柄でございますので、御前に種々の心尽しの物を供え、在籍者を始め、参き集う人々と共に、ご遺徳を偲び、ご生前のご丹精を改めて厚く御礼申し上げます。

年祭活動の一年目を迎えて、私共をはじめ芦津に繋がる道の子は、日々の信仰実践に勇んで動き働いて、教祖百四十年祭を目指して、仕切って成人の道を歩ませて頂き、たすけ一条に一手一つに励ませて頂く所存でございます。何卒、霊様方の尽くし伏せ込まれたお徳を以て、時句の歩みを見守り下さいますと、たすけ一条の頼もしき道をお導き下さいますよう、一同と共に慎んで御願ひ申し上げます。

《教会長子弟育成者研修会に於ける大教会長お話》

親が子に期待をかけ続けよう

大教会長 井筒梅夫

賑やかな教会を

以前にも話したことがあります
が、ある大阪の他系統の教会では、
毎月の月次祭に80名から90名の、
おつとめに出る人がいるそうです。

そして、そのうちの9割が初代か
らの繋がり、つまり親戚なのです。

もちろん、女性で結婚して嫁いで
も、その教会に繋がって信仰をし
ている。

ですから、子弟の育成、丹精が
行き届けば、教会はこんな姿にな
るのだな、という一つの手本みた
いな姿だと私は思います。

実際、私たちが布教をして、一
人の人に信仰してもらうために、
にをいをかけ、おたすけをして、
信仰してもらうことは、並大抵な
ことではありません。しかし、子
弟を育成するということは、新し

い人を導くことに比べれば、容易
だと思われます。しっかりと子弟
を育てていけば教会も賑やかな御
守護が頂けるということです。

親神様の御期待

では、「教会に生まれる」とは、
どういうことなのか。育成してい
く教会長や教会の者は、ここをし
っかりと考えなければなりません。

この世のすべてのことは、偶然は
一つもなく、必然です。親神様の
思召通りにすべてが進んでいつて
いる。そう考えれば、教会に生ま
れてくるということは、決して偶
然ではない。生まれるべくして生
まれたのです。

そう思えば、教会長の子弟には、
親神様が「将来、お道の上で陽気
ぐらしの実現のためにしっかりと
通ってほしい」という期待を頂い

ている。この「親神様の御期待が
ある、そうした子を預かっている」
ということ、親の側が忘れては
なりません。さらにはその思いを、
子供たちが理解してくれるように、
根気よく育て、丹精していくこと
が縦の伝道だと思ふのです。

ところが、どこの教会も、これ
がなかなか難しいのです。「道
の上に働かせてもらう、これが親神
様の御期待に應える道なんだ」と
このことを素直に分かってもらう
ためには、やはり「適切な親子関
係、良い親子関係」を築くことが
大切だと思ひます。形はいろいろ
あると思ひます。例えば、何でも
言い合える親子。思つたことを言
い合える親子というのがあります
が、これも良い親子関係の一つか
もしれません。

私のことを例にとれば、私は父
の42歳の子で、歳が離れていまし
た。また父は寡黙でした。新聞を
読みながらご飯を食べている姿が
一番印象にあります。事細かに何
かを言ってくれるわけではありま
せんでしたが、周りの人たちの父

に対する態度が、私にとっては強
烈な印象でした。

父の悪口を聞いたことは一度も
ありません。それどころか、心か
ら父を慕い、親としてすがって
いる。そういう姿を見ていましたか
ら、私は「父は素晴らしい人」「す
ごい人」と思ひましたし、身体も
大きかったので、「こんな人になり
たい」と小さい頃から思つていま
した。「こんな人になりたい」と
思うような背中を見せて通つてく
れた。それが私と父との適切な関
係だったと思ひます。

親が期待をかけること

信仰者として良い親子関係、適
切な親子関係を築くため、そして
それを元に信仰者として育ててい
くために大切なことは、「親や周囲

が子供に期待をかけているかどう
か」だと思ひます。

ある教会で、熱心にコツコツ通
っている教会長さんがいました。

ところが、子供は優秀ですが、2
人とも都会へ出て行つてしまひ、
教会を継ぐつもりがないそうです。

よく聞くと、親である教会長が、「お前たちにはお前たちの進むべき道があるかもしれないから、自分の思う通りに、好きな道を進んだらいい」と言ったそうです。これだけを聞くと、実に寛大な父親の態度かもしれません。しかし、ここには「教会の後継者として、またようばくとして、道の上でしっかりと通ってもらいたい」という親の期待が一切なかったわけですから、期待をかけられない子供は、応えようがありません。ですから、全く継ぐ気がなくなってしまった。これは自然の流れだと思っています。

この会長さんが「この子は親神様から預かった子、教会に生まれて来たいんねんのある子だから、親神様からこの子に思いがかかっているんだ」ということを少しでも考えていたら、こんなことにはならなかったと思うのです。親が子供に期待をかけることは、とても大切だと思います。「この子はダメだ、無理だ」と思って接していると、ダメになるし、無理になるでしょう。

また、期待のかけ方もいろいろあると思います。口に出して、期待をかける方もいるし、態度で示す方もいると思います。

これも私のことですが、私の父は本当に寡黙でしたが、態度をもつて示してくれました。私は小さい頃から、時間があつたり休みのときは部内教会へ連れて行ってくれました。そのときの父の態度や、周囲の父に接する態度を見てきました。そういうことがものすごく私の印象にあります。

父は語りませんが、周囲の人たちが皆、「お父ちゃんみたいな会長になつてくれよ」「お父ちゃんみたいに頑張つてくれ」と、父の代弁をするように期待をかけてくれました。それを通して、父親も私に期待をかけてくれているんだなということが、だんだんと分かってくる。きて、「やはりこの期待には応えさせてもらわないかなあ」と思いました。

決定的な一言

私たちの世代は、教会で生まれ

た子供は、殊に長男や後継者は、「いずれは教会を継がなければならぬ」とみんなそういう気持ちになつていました。積極的に「やらせてもらおう」という者もあれば、「いずれはやらなければ」という意識の者もありました。積極的な人は、若いときから一生懸命で、たし、私は「いずれは帰らねばならないから、学生のときぐらい遊んでおこう」といって、東京の大学で好きなことをした時期もありました。しかしそれは「いずれ帰つたらやる」という気持ちがあつた。それはみんな、親や周囲から期待をかけられていたからです。

ところが今、それがなかなか十分ではないのではないかと、危惧しています。

私は父の姿を見て期待を感じましたし、「やらしてもらおう、やらなあかん」という気持ちにだんだんとなつてきました。

そして決定的なことが一つありました。口に出して言わない父ですが、私が大学2年生ぐらいのとき、天理大学に行っていた弟と、

2人揃って呼ばれました。父は私に「お前は次に教会長をやれ。しっかりと通るんやぞ」と、そのとき初めて言ってくれました。私は、「分かった」と返事しました。

そして弟には「お前はお兄ちゃんを一生かけて支えていけ。いずれ井筒の家は本部で勤めなならん時が来る。会長が本部の御用を勤めるようになったときに、教会のことがあるからと言って、本部の御用を疎かにしてはならん。本部の御用をするときは命懸けでやる。そうすると教会のことがどうしても手薄になるし、留守になる。それをお前が支えていけ」と、弟には言いました。それで弟も腹が決まった。これは決定的な出来事でした。

私はそれまでもやるつもりでしたが、「よし、頑張ろう!」と覚悟ができました。弟も「分かった」と受けた。だからずっと大教会にいます。他の大教会から養子のおもあつたのですが、「親父との約束がある。おれは大教会に残る」と言つて本人が断りました。父親に



言われた一言が決定的だったのです。

父はそれから、私に対して「教会長になったら、こうせよ」ということを、たびたび言ってくれました。

こうして親から期待をかけてもらった。それに何とか応えようと、今の私があると思います。

我が子に言い聞かせて

では、我が子に対してはどうかと言え、父のようなやり方はできません。

私は、父は規格外の人だと思っています。「父に追いつけ、追いつ

越せ」と思った日もありましたが、あんな人にはなれない。だから、私は息子に対しては言葉で、口に出してしょっちゅう言いました。

小学校の頃から、お風呂と一緒に入ったら「お前は教会長になるんやぞ。お父さんも一生懸命やるから、お前もその後をやるんやぞ」と、刷り込むように言い聞かせました。

そして気を付けたことは、子供の前では絶対に文句を言わないこと。お道のこと、本部のこと、部内のこと、教友のことを、絶対に悪く言わない。それだけは心にかけて、「お前が教会長をやるんやぞ」と言い続けてきました。ですから本人は「やらなあかん」ということを刷り込まれたと思います。

そして息子にも、やはり決定的な出来事がありました。

息子は「大学4年間は好きなことをさせてくれ。帰ってきたらやるから」と言って、1浪して東京の大学に行きました。大学1年生

のときの大晦日、初代様は大晦日

に出直していますから、家族で豊田山のお墓地に参拝に行きました。

初代真柱様も大晦日に出直しておられますから、中山家のお墓参りも同じ日です。そのとき、大亮様

が養子に入られてすぐの頃で、ちょうど一緒になったので、長男と長女を連れて挨拶に行きました。

すると、大亮様が息子に「いずれやらなあかんのが分かってるんやったら、今は遊んで来い。俺も

いずれ通らなあかんから、大学時代は死ぬほど遊んだ。お前も死ぬ

ほど遊んで来たらしい。その代わり帰ってきたらしっかりやれ」と言ってくださった。息子は「分かりました」と言って、それが決定的でした。「よし、やろう」とい

う気持ちになってくれました。息子は、大学4年間ほとんど帰

ってこず、好きなことをしていました。大学を卒業したらすぐに修養科に入り、本部青年に入っ

て、今があります。

大亮様は息子にとって生涯の直接の理の親ですから、理の親がど

んと背中を押してくださった。これが腹に治まった日だったので

「これは初代様が働いてくださった、初代真柱様も後押ししてくださったなあ」と、そのとき痛烈に思いました。

このように、子供に期待をかけることは絶対に忘れてはならないと思います。そして、教会に生まれて来た子は、「親の期待に応えよう」とする素地、いんねんが必ずありますから、親が子供に期待をかけ続ける。これが基本だと思えます。そして、親神様がかけてくださっている御心があるわけですから、育成者はこれをしっかりと心に置いてほしい。

皆様方には、部内の教会長、教会にかかわる方々にも、子弟には親神様の御心がかかっていること、そして親が子にしっかり期待をかけるということを中心に置いて、育成の上にご丹精くださるよう、お伝えいただきたいと思えます。

あしつスプリングフェスタ開催

3月27日から30日まで、育成部（山田道弘部長）は、春の若年層育成期間「あしつスプリングフェスタ」を開催。マスクの規制が緩やかになるなど、コロナ禍が落ち着きを見せる中、芦津に繋がる大勢の若者たちがおどば、大教会に集まった。

HAPPY徒歩団参

3月27日、学生会を中心に大教会からおどばへの徒歩団参を実施した。中学生から25歳までの若者28名と、学生担当委員会・婦人会・青年会のスタッフ12名、計40名が参加した。

午前9時30分、大教会に集合し、班ごとに自己紹介をした後、10時からお願いづつとめに参拝。10時30分にマイク口パス2台で大教会を出発し、十三峠登り口からおどばへ向けて歩き始めた。

前日の雨も上がり快晴の御守護の下、学生たちは急勾配の山道を励まし合いながら歩いた。十三峠展望台で記念撮



影の後、下り坂では学生同士がゲームをしたり、和やかに話しながら歩いた。

平群スポーツセンターで昼食後、再びバスで移動。奈良県浄化センターから、再度おどばを目指し歩き始めた。



午後4時、本部神殿前に到着。おやさとやかたのしだれ桜を背景に記念撮影し、約13kmの道のりを全員が笑顔で歩き切った。

参加者からは「足にマメができたけど、すごく楽しかった」「初めての参加だったけど、みんなが話しかけてくれて嬉しかった」などの感想が聞かれた。

春の学生おどばがえり

3月28日、本部中庭において「次代を担うようばくに」をスローガンに「春の学生おどばがえり」が開催された。

芦津学生会（木村里香委員長）は、芦津直属隊を結成し、43名の学生が参加した。

午前10時、晴天の御守護の下、吹奏楽の生演奏が流れる中、式典がスタート。真柱様より道の学生に対してメッセージを頂戴し、「道の学生の歩み」では、2名の学生がそれぞれの経験の中から、周りへの感謝の思いを発表した。

また、井筒いつみさん（直轄）が式典の総司会を務めた。

式典終了後、参加者は詰所に移動し、教区から参加した学生も合流して、芦津に繋がる学生52名で「直属アワー」を開催した。

はじめに大教会長が挨拶。親神様の御守護のありがたさについて話を進め、「感謝と喜びの心で教祖のひながたを歩んでほしい」と願われ、このお道を喜んで通って「人として成長し、信仰者として成人して、将来を担うようばくに育ってほしい」と期待を述べられた。



盛り上がりを見せた「格付けチェック」

木村委員長の後、婦人会手作りのカレーを頂き、大広間でレクリエーションタイム。自己紹介や班対抗ゲームなどで交流を深めた後、豪華景品をかけて「格付けチェック」で盛り上がり、笑いの絶えない時間を過ごし、仲間との絆を深めた。

参加者やスタッフからは、「緊張していたけど、楽しい時間を過ごせた」「最初は不安もあったけど、みんなの笑顔と喜んでくれる姿に助けられ、素晴らしい時間を過ごせた」などの感想が聞かれた。

わかぎの集い

3月29日、中学生を対象に「わかぎの集い」を大教会で開催し、18名が参加した。

午前10時、大教会神殿で開講式の後、おつとめ練習。まず翌日の少年会総会で勤める座りづとめとよろづよ八首を、各パートに分かれての練習。

参加者はそれぞれの担当の先生の話真剣に聞き入り、熱心に取り組んだ。その後、神殿で全体練習を行った。

続いて陽気ホールに場所を移してのウォーミングアップ。全体で親睦を図るゲームを行い、その後は班に分かれての対抗ゲームを行うなど、笑顔溢れる和やかな雰囲気となった。

昼食は、食堂で大阪名物の串カツ。参加者は、目の前で揚がった出来たての串カツを堪能した。

午後からは、新世界（大阪市浪速区）に移動し、通天閣や新世界にまつわるクイズや、ビリケンや看板を探すウォー



クラリーを班対抗で楽しみ、大いに盛り上がった。

帰会后、閉講式を行い、大教会長が参加者に対して「今年のこともおちばがえりにも友だちを誘っておちばに帰ってほしい」と話され、最後に大教会長を囲んで記念写真を撮り、閉会した。

参加者からは、「普段あまりしたことのない鳴物の練習がしつかりとできてよかった」「短い時間の中で皆と仲良くなれて楽しかった」といった声が聞かれた。

少年会京津団総会

3月30日、少年会京津団（加世田洋団長）は大教会で第51回総会を開催し、少年会員241名、育成会員246名、計487名が集まった。

午前10時、親神様、教祖、祖霊様を礼拝の後、瀧本みちのさん（天津隊）が開会の辞を述べた。

次に、祭主・奥田元郎君豊野隊、扈者・石川道二郎君、石川諒君（共に直轄隊）が入場し、奥田君が祭文を奏上。

この後、おつとめ、わかぎの集い参加者、門出生が座り



づとめ、よろづよ八首を勤めた後、各隊が二下りずつ交替で勤め、練習の成果を親神様、教祖にご覧いただいた。

式典では、少年会長様の御告辞を加世田団長が代読し、続いて大教会長がお話。4年

振り、今夏開催されることもおちばがえりの「生きるよろこびを味わいます」「ものを大切にします」「仲良くたすけあ

います」の三つの約束を説明し、「人生を歩む上でこの三つの約束は大切なことなので、心において、過ごしてください」と話された。そして、「子どもおちばがえりには友達を誘って、夏のおちばを楽しみに参加してください」と呼びかけた。

続いて、今春中学校を卒業する門出生43名を代表して、山下保君（芦山都隊）と今川ちひろさん（春日出町隊）が教祖の御前で「門出の言葉」を述べた。

次に、お供え作品展入賞者を代表して、高馬佑依さん（浪華浦隊）に大教会長から賞状

と記念品が授与された。その後、奥田涼子さん、奥田絢子さん（共に直轄隊）が演台に進み、全員で「ちかい」を唱和した後、「少年会の歌」を歌い、瀧本理生君（紀周隊）が閉会の辞を述べた。

この後、門出生は対面所で「成人門出式」。大教会長からお話があり、お祝いの品が手渡された。

午後からのお楽しみ行事は、模擬店を行い、参道にはゲームコーナーやピッキートランポリンが今年も設置された。大抽選会にはあしつレンジャーも登場し、楽しいひとときを過ごした。



お楽しみ行事の最後は大抽選会

会長室報

青年勤務辞退

【大教会】

原田 成人（笠 戸）

立教186年3月23日

専修科生

木村真太郎（菅明德）

事情はこび

立教186年3月26日お許し

照南分教会

任命

四代会長

瀬戸山眞美

66歳



天理高校第二部卒。昭和51年おさづけの理拝戴。55年修養科第47期修了。令和4年教会長資格検定講習会修了。上級・始良分教会では、毎月2回のおさづけの当番と祭典準備ひのきしんを長年

欠かさず勤めている。
就任奉告祭 6月4日

天津分教会

神殿建築

遷座祭 5月20日

鎮座祭 12月9日

奉告祭 12月10日

教務部報

教養掛（1月～3月）

教養掛主任

山本 義範

教養掛

奥田 正儀・森 誠一朗

梶川 芳征・齊藤 洋

梶川りよ子

教人登録

緒方千代子（鳥 栖）

立教186年3月15日

教人資格講習会第129回修了

辻本 英子（西 浜）

南方 美香（西 浜）

南方 郁香（西 浜）

南方 紀香（西 浜）

立教186年3月13日

初席《2月》

《5名》直轄

《1名》島下、和鎮

《順序運びより 7名》

計 報

大教会婦人

尼崎分教会五代会長

西本菊江姉（にしもときくえ）



令和5年3月17日出直された。95歳。

告別式は3月21日、大教会

長斎主のもと、尼崎分教会で執り行われた。

姉は、昭和3年、父・松下

儀三郎、母・そでの長女として大阪市に生まれ、19年双葉

月例統計（自令和5年1月1日～至令和5年2月28日）

項 目	初	の	修	教
名 称	席	お	養	人
大 教 会 (1)	7	8		
東 津 (13)				
吉 野 川 (23)	1			
島 原 (29)				
日 方 (16)				
稗 島 (15)				
本 津 (7)	3			
日 高 (2)				
始 良 (2)				
津 和 (5)				
門 司 (12)		2		
當 別 (6)				
大 島 (26)	6			
沖 縄 (3)				
尼 崎 (2)				
四 ツ 山 (5)				
大 冠 (2)				
島 下 (1)	1			
天 保 山 (3)				
青 木 (1)				
芦 浪 (1)				
甲 邊 (1)		1		
芦 華 (1)				
天 津 (1)				
入 江 (1)				
豊 野 (1)				
紀 周 (3)				
勝 明 (1)				
神 の 島 (1)	1			
兵 庫 眞 洲 (1)				
芦 ノ 郷 (2)				
本 明 勇 (2)				
明 道 (1)				
芦 東 (1)				
和 鎮 (3)	1	1		
神 滝 本 (1)				
芦 明 德 (1)		1		
眞 明 彰 化 (2)				1
本 氣 (2)				
芦 明 照 (1)				
眞 伯 (1)				
合 計 (209)	20	13	0	1